

雨の匂いと 少年時代

雨音 多一



君は一生に一度の言葉を覚えていますか。夏のあの日の言葉を。人生を変えた言葉を。僕のそれは、夏の雨の匂い共にある。鮮やかな赤と緑のスイカ。風の吹く部屋。そして雨の匂い。

そろそろ雨が降るのだろうか。西の空に雲がある。風が凧いだ。そして雨の匂いがする。僕は郵便受けを覗いた。手紙がある。誰からだろう。僕は鮮やかなヒマワリの写真がプリントされた葉書の裏を見た。

「前略 ケイタ君、お元気ですか。今度の夏休みにそちらへ遊びにいきたいの。よろしくね。リサより」

僕は嬉しさで心が震えた。昔なじみの理沙からだ。理沙と初めてあった日の事がまざまざと甦った。あの日も、こんなに胸が熱くなった。あれは三年前の夏のことだ。

「ただいま！」

僕は勢い良く玄関のドアを開けた。ヒグラシが夏の夕べに鳴きはじめた。日がゆっくりと傾いていく。

三年前の夏、僕は中学二年生だった。久しぶりに、両親と共に田舎の祖母のもとへと泊りがけで遊びに行ったのだ。祖母は山形の田舎町に住んでいて、畑仕事などをして暮らしていた。祖母の名は「君江」といい、僕は「君江ばっちゃん」と呼んでいた。そう、あれは三年前の出来事だった。

「ケイタ、スイカ食うか？」

にこにこしながら、君江ばっちゃんがスイカを持って茶の間に入ってきた。

「ありがと。そこに置いてて」

僕は夢中で本を読んでいた。

「冷たいうちに、食べんだよ」

君江ばっちゃんはスイカと麦茶をテーブルに置いた。風鈴が涼やかに鳴った。

「ケイタ、何を読んでんだ？」

「夏休みの読書感想文の課題図書。いまいいところなんだ」

「ん、『六月の雨』か」

「結構コレ面白いんだよ。奈子ちゃんて、いい子だなあ」

「スイカ、冷たいうちに食ってけろな」

「うん」

小玉スイカが四半分の大きさで、特大の皿にのせられている。スプーンで食べるのが一苦労。かなりの量である。君江ばっちゃんはスイカを河原の畑でつくっている。トマトもあるらしい。スイカの甘く爽やかな匂いが漂ってきた。

僕は本を置くと、スイカをのせたテーブルに向き直った。

シャリ、とひとスプーン、スイカを取り、口に運ぶ。果汁と甘い匂いが、口一杯に広がる。

うん、おいしい。

風が吹いてきた。縁側からの風は、扇風機にのって、部屋をぐるりと一周する。風通しがすこぶる良いのだ。

「高気密ではないけれど、ああいう家も良いわよね」

それは母の口癖だった。

縁側の窓は網戸になっていて、向こうに広がるトウモロコシ畑が見える。

「君江ちゃん、居る？」

誰だろう。

「はあい」

君江ばっちゃんが返事をした。僕は君江ばっちゃんと共に玄関に向かった。

「こんにちは」

玄関に居たのは、三十五才位の女性と僕と同年位の少女だった。少女のつぶらな瞳に、僕はドキリとした。

「ああ、夏枝さん。よくござったな」

君江ばっちゃんが、にこにこしながら出迎えた。この子はその娘なのだろうか。胸の鼓動が早くなった。

「ケイタ君、だったわよね」

君江ばっちゃんと女の人がひとしきり話した後、話が僕の方へと向いた。

「えと、はい、そうです」

「隣の家に住んでいる、真木といいます。よろしくね。ケイタ君は夏休みで遊びに来たのね」

「そうです」

「こっちが娘の理沙よ。仲良くしてね」

「こんにちは、理沙です」

「どうも」

それしか言えなかった。僕は真っ赤になった。

「何年生？」理沙が尋ねた。
「中二だよ」
「じゃ一緒だ。同級生ね」
僕はそれだけ話すと俯いた。

ヒグラシが鳴き始めた。
夏の夜が近づいてくる。静けさが降りてきた。

それから、僕と理沙は一緒に遊ぶようになった。オセロや将棋をしたり、夏の山や河へ遊びに行ったりした。もちろん夏休みの間だけである。冬休みに君江ばっちゃんの家に行くことは殆ど無かったからだ。だから夏になると思い出すのだ。あの日に見た、星や花火やスイカとともにある、理沙の姿を。

夏休みまで、あと十日位の頃だった。理沙からの葉書が届いたのは。高校二年生の夏休みは毎日のように、補講があった。その中でいつ頃理沙と会えるのか、頭の中で考えを巡らせていた。

「お母さん、今年の夏休みに理沙が来るって」

僕はキッチンへ入るなり、母にそう告げた。そして、理沙からの葉書を手渡した。

「あら、そう」

母は目をしばたかせた。

「それは楽しみね」

「うん」

僕は思わずはにかんだ。

夏休みは理沙と共にやってきた。理沙は真木家の親類の家に泊まっていた。街はうだるような暑さだった。アスファルトの大地は熱を帯び、連日のように熱帯夜が続いていた。

「カラオケとゲーセン、どっちにいきたい？」

それが僕のデートプランだった。

じゃあカラオケ、と言うのかな。

理沙は唄うことが好きだった。会う前の小一時間、僕は会ってから何を話すか、何度も考え続けていた。本当に大丈夫だろうか。

待ち合わせ時間になった。近づいてくる影。あれは理沙だろうか。

「や」理沙だ。軽く手を挙げる。

「よ」

僕らは上手く言葉を交わせなかった。でも気持ちは通じたんじゃないだろうか。

「カラオケとゲーセン、どっちに行く？」

「それより冷たいものが飲みたいの」

「じゃ、カフェでも行くか」

「そうね」

近くのカフェに入る。カフェは黄土色の壁をしたビルのテナントの一角だ。前に入ったことがあった。「オセロ」という看板が、表の道に面して立てられていた。

からん。

中は空調が効いていて、汗ばんだ体を優しく冷やすようだった。

「何にする？」僕はメニューを理沙に渡しながら尋ねた。

「私はアイスコーヒー。ケイタ君は？」メニューを僕に返ししながら、理沙は告げた。

「えと……、僕は……」

メニューに目を走らす。……そうだな、コーラにするか、レモネードにするか……。

僕はもう一度メニューブックをめくった。

「ご注文はお決まりですか？」ウェイトレスがもうやって来た。どうしよう……。

「私はアイスコーヒーで」と理沙。

「はい」

「えと、僕は……、アイスコーヒー。同じの」

さんざん迷った挙句、僕はやっとそれだけを言った。

「私ね、先生になろうと思うの」

「学校の？」

「うん、中学校の理科の先生になりたいんだ」

「それで、こっちへ来たんだ」

「そんなところよ」

「大学を見に来たんだね」

「うん、まあ」

理沙は、てるるね、と洩らし、グラスの水に口を付けた。やさしい顔に髪がかかった。

「お待たせしました」

ウェイトレスがアイスコーヒーを二つ、トレイに乗せてテーブルの脇に立った。そしてアイスコーヒーを置いて一礼した。

おもむろに理沙が口を開く。

「私ね、子どもと向き合う仕事に就きたいの」

「そうなんだ」

「ケイタ君は？ 進路、どうするの？」

「え」

「言いたくないなら良いんだけど」

「うん、ちょっと……」

僕はそれだけ言うとアイスコーヒーを一口飲んだ。

「僕は……」

正直言うと、進路を決めかねていたのだ。

「どうするの？」

「今度話すよ」

「うん」

「……さて、カラオケにでも行こうか」と僕。

「まあ、イケド……」

話が余りかみ合わないまま、最初のデート先は終わってしまった。

カラオケボックスは、夏休みの学生が----勿論、僕たちもそうなのだが----何人か居て、順番を待っていた。

「二時間でいい？」

ようやく順番になり、僕らはカウンターで受付をした。マイク二本を貰って、No. 3のボックスに入る。

「あー涼しい」

「なんか緊張するね」僕はそう呟いた。

僕らはそれから二時間唄い、併設されたゲーセンでクレーンゲームを楽しんだ。

「それじゃ、また今度」

理沙はそう言うと、クレーンゲームで獲ったウサギのぬいぐるみを嬉しそうにかかえて帰った。僕は楽しかった一日を振り返りながら、帰路についた。

携帯が鳴った。

「あ、お母さん？」

「ケイタ、悪いけど、帰りに八百屋さんでスイカ買ってきてくれない？ お客様がいらっしゃるの」

「分かった」

僕は雲行きが怪しくなった空を見上げながら、道を急いだ。

ポツリ、と雨粒が落ちた。

「いらっしゃい」

近くの八百屋さんに入る。

「ええと、スイカありますか？」

「表の店先にあるよ」

その言葉で僕は一旦店の外に出た。

----雨の匂いがする。

半分に切られた真っ赤なスイカが、記憶を呼び覚ました。

あれは三年前、理沙と空き地へ遊びに行った帰りのことだった。

「雨の匂いがする」

理沙はそう言って立ち止まった。

「本当？」

「うん、わかるの」

ぽつり、と雨が降り出した。

「やっぱり」

「すごいね」

「いつもの事よ」

理沙はニイと笑った。

「降り出したみたい」

雨粒が落ちてきた。僕らは、雨宿り先を探して走り出した。

「君江ばっちゃんの家まで急ごう」

「うん」

ずぶ濡れだった。夏の夕立は気まぐれで、僕らが家に着いた頃にはもう止んでいた。

「ただいま」

「あら。すぐにタオル持ってくっがらな」

「アリガト」

君江ばっちゃんは、大きなタオルを二枚持ってきて、僕と理沙に渡した。僕らは水気を絞りながら、夏の夕立をきれいに拭いた。ずっと体に染み込んでしまった雨。それは思い出のようだった。今でも思い出す。スイカのよ

うに甘くみずみずしい思い出だった。

「理沙も、スイカ食ってげ」

「ありがと、おばあちゃん」

君江ばっちゃんが、スイカを台所で切って持ってきてくれた。

「わあ、大きいスイカ！」

理沙はよくスイカを食べていたが、今日の切り方はいつになく大きかった。

「いっぱい食べてけるな」

「うん。ありがとう」

僕と理沙は並んでスイカに向かった。

雨の匂いはそんな思い出と共にあった。

「ただいま。スイカ買ってきたよ」

「ありがとう」

台所で僕は母にスイカを渡し、立て替えたお金を貰った。

「少し食べるでしょ」

「うん」

母は大きなスイカを包丁で十六分割し、僕のテーブルの前に置いた。

「どうぞ」

一口食べた。雨の日がもう一度甦った。

『腹いっぱい食えろな』

君江ばっちゃんの声が聞こえた気がした。

「おふくろ、あのさ……………」

「何？」

「進路のことだけど……………」

それは理沙から貰った勇気だった。

雨が降り出した。

少年時代の思い出は誰にでもある。陽炎のような夏の思い出。

雨は心にも降る。雨の匂いが漂う時、そこに思い出はある。夏の日が、かけがえのない宝石のように煌めいた。雨の中を駆け抜けた少年時代の夏の日は永遠である。

そう、たとえこの夏が過ぎても。

(結)

あとがき

<謝辞>

この本を電子出版するにあたっては、担当編集者の捷雄さん、Big.Sさん、まりこさん、風間さん、飯田さん、こすずさん、Bellyさん、百合子さん、都穂さん他多数の方々に大変ご尽力いただきました。この場を借りて、御礼を申し上げます。有り難うございました。

雨音 多一

<ご注意>

映画化・ゲーム化・コミック化・アニメ化にあたっては、著作権料をいただきます。必ず、下記メールアドレスまでご連絡くださいませ (qqgr3ww9k@snow.ocn.ne.jp)。

別途、契約が必要となります。
通常印税は、総売上の5%となります。

よろしくお願ひ申し上げます。

<発行年月日>

初版発行 2018年（平成30年） 10月23日（火曜日）

雨の匂いと少年時代

<http://p.booklog.jp/book/124301>

著者：雨音多一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/taichi-amane/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/124301>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト